

# 琉球大学学術リポジトリ

## 米国管理下の南西諸島状況雑件 啓発・広報(Ⅲ)

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2019-02-01 キーワード (Ja): 佐藤総理訪米, 啓発、広報活動 キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/43484">http://hdl.handle.net/20.500.12000/43484</a>

東河沿地新報

原卷第拾

44/1/5

64.11.5 決裁  
6日 送

情文局長  
国内広報課長

執筆者 所属局課長

要再回 国内広報課

寄稿 (出版) 届

- 1. 寄稿 (出版) 依頼者 東洋経済新報社
- 1. 掲載誌名 (出版社名) 経済生活 講談
- 1. 掲載誌発行予定日 11月20日 (予定)
- 1. 本題

上記のとおり原稿を添えお届けします

昭和64年11月5日

アール 局広報課

官職

氏名 千原一夫 (印)

(備考 掲載誌1部を国内広報課に寄贈して下さい)

11 11月20日 (44.11.20)

# 沖縄返還問題について

外務省 千代田 夫

- \* 沖縄の歴史
- \* 第二次大戦当時の沖縄
- \* 終戦直後の状況
- \* 沖縄の軍事基地の意義
- \* 日本政府はどう対処してきたか
- \* 佐藤総理の訪米交渉
- \* アメリカの世論
- \* ベトナム戦争との関連
- \* 本土並み、核抜きの方針
- \* アメリカ側の態度
- \* 残っている核の問題
- \* ポスト・沖縄の日本の新時代



富川 (拍手) では開会をさせていただきます。

きょうは北米第一課長の千葉さんにおいでをいただきました。千葉さんは今度の沖縄返還交渉につきまして、愛知外務大臣にご随行になりましてたいていの席にはいっしょにおられたということでございますので、だいたい沖縄返還交渉の感触といえますか、模様をひとつ伺いたいと思います。

佐藤総理がおいでになるまでは、いいところ、悪いところ、むずかしいところはみんな隠れているんでありますけれども、おおよそ空気を伺えばその精神も想像できようかというわけで、千葉さんにおいでいただいたら茶の間の話ぐらいいは聞かれるだろうと、こういうことを期待しておるわけ

でございます。しばらくご静聴をお願いいたします。(拍手)

千葉 (拍手) ただいまご紹介にあずかりました千葉でございます。

お聞きになりましたとおり、愛知外務大臣に随行いたしました二度アメリカへまいり、沖縄返還交渉に若干携わっておるわけでございます。

本日はまず終戦以後今日まで沖縄問題がどう扱われたかということをお話し上げ、そしてアメリカ側はどういうふうな考え方で沖縄問題に臨んでおるか、またどういうふうなその考え方が変化してきたか、さらには、二度にわたる愛知訪米および今後の佐藤訪米に向けての交渉の段どり等をだいたいお話ししたいと思っております。その前に、沖縄問題が今日に至った背景を

ちょっと簡単に申し上げたいと思います。

#### 沖縄の歴史

ご承知のとおり戦前の沖縄は、明治初年のいわゆる琉球処分という、沖縄の人からいわせると非常に過酷なる経過を経て、日本帝国の一県となつたわけでございます。それ以前は琉球王国というのがございまして、いまでも尚公爵家が残っておりますが、尚さんとおっしゃるご一族が王家としてやっておられたわけでございます。沖縄の人は、人類学的にも、また文化的、歴史的に見ても、あらゆる面からいって日本民族の一環であり、また沖縄の人々自身もそう思っているわけでございますが、歴史的な経過もありませんし、また何といたしまして日本の国家を建設しました中樞

の大和から遠く離れておることと、結局独自の政治的組織ができたわけでございます。

古い話はこのぐらいいまして、とにかく結論は、慶長年間に薩摩が、ときの独立王国であった琉球王国を征服してこれを従えました。しかし、中国との貿易の利をなくさないために、その独立性を一応認められたことになりました。朝貢というのはい見隷属のようでございますが、実際問題としては貿易の別名にすぎないわけで、中国との関係は、年々朝貢使が行きましてそこで貿易をやり、向こうから王様の代替わりがあるたびに冊封使というのがやってきまして、これまた実は裏で貿易をやっておられたわけでございます。

中国と琉球との関係は、以上のとおり推して知

るべきものでありまして、主権が中国にあったとは申せないわけでございます。いまでも中華民国は、ときどき琉球というのは日本に所属すべきものじゃないんだ、というようなことをいっておりますが、しかしこれは、自分に所属すべきものだともいっていないのでございます。中共のほうは明らかに、これは日本人民に返し、米帝から解放すべきだ、というようにことをいっておりますので、自分のところの一部だと考えていないようです。

だろろうとか、あるいは王政復古というからまた独立させてくれるんじゃないかろうとか、そんなふうなことを考えておるうちに、当時の清朝と日本との間ですったもんだがあり、結局、断固として日本はこれを一票にしてしまったわけです。その後五十数年間の憲政の間におきまして、本土からどんどん人が行って、県知事はじめ警察署長から学校の先生まで、全部日本の本土の人が占める、そして土地の人は、一種の劣等感にさいなまれながら暮らしてきた。にもかかわらず、その間に沖縄の人たちは日本のナショナルリズムというものを身につけ、あの非常に苛烈な第二次大戦神尾の沖縄防衛戦闘の中で、忠勇なる日本国民であるということを遺憾なく証明されたわけでございます。

### 第二次大戦当時の沖縄

ここで戦争当時の話になりますが、戦況がだんだん悪化いたしました。いよいよわが本土の領域にまで米側が手をつけ出しました。昭和十九年の秋、一〇月一〇日に向こうの機動部隊が那覇を空襲し、那覇港内の艦船は全部沈められ、港湾施設ももちろん破壊されましたが、同時に那覇の町が三分の二くらい焼けてしまったわけでございます。そのとき日本側の態勢はまだ十分整っており、ようやくアメリカの潜水艦の危険をおかして第三三軍という軍が集結していましたが、初め三個師団おつたち、一個師団は台湾防衛に抜かれて、二個師団強になったという手薄な状況であったわけでございます。

したがって、軍は、自分の陣地をつくったり、自分たちのほうの手当てをするのでせいっぱいで、民間の人にまで手が及ばなかった。これが沖縄問題の一つの特色を今後形成していくと思っておりますが、本土に対する一つの深刻な恨みというものが胚胎しておるのもこのへんでございます。そこで、米軍が上陸したときは、数個師団、わが三個師団半の三倍ぐらいの兵力であり、空から飛行機で、海からは文字どおり真っ黒に埋め尽くすほどの大艦隊があの小さな島に襲いかかり、鉄の暴風雨といわれるぐらいの鉄量を注いだわけでございます。上は戦艦ミシシッピー号の一四インチ砲から、下は上陸用舟艇から発射するロケットに至るまで、そのために地形が変わるほどの鉄量を注ぎ込んだわけでありまして、これに対

しまして二個師団半のわが軍は、さらに若干の海軍と、それから徴集した沖繩の男の人、これらを駆使して非常な猛抵抗をやり、八三日間もがんばったわけでありませう。

アメリカの当初の作戦計画では、いくらがんばってもこのくらいと、非常に精密なスケジュールを立てていたそうですが、それが全部たまたま、しかも三回計画をやりかえたと、そういうふうな逸話がありますけれども、それほど猛抵抗したわけではございません。しかし、これは当然やられるのはきまつてるわけではございまして、最後に牛島司令官が自決をして組織的抵抗を終了した。その間ひめゆり部隊のようなあんな悲劇もありまして、さんたんたるうちに戦争が終わったわけではございません。

ただし、アメリカの最高指揮官のバックナー中将も、日本側の撃ったほとんど最後の砲弾に当たって死んでしまったわけではございまして、そのほかアメリカの師団長代理とか、高官で倒れるものも相当多くございまして、決してアメリカにとって自慢になる戦争ではないわけではございません。数倍の人間、何百倍の鉄量、絶対的な制空権、制海権をもつてしてもそれだけ時間がかかったというものは、ある意味では、日本民族の一面を物語っていると思っております。

そして、沖繩がここでついに玉砕したわけではございますが、これはいったい戦略的に何を意味するかといえますと、結局沖繩というものが犠牲になつて、日本本土に防衛する時をかせがしたと、そういうことになるわけではございまして、ご承知

のとおり、あの終戦直前のいちばん暗い時代、その八三日間を利用して日本軍は洞窟をつくり、師団を召集し、兵器も生産し、あるいは物資を集結したわけではございます。

#### 終戦直後の状況

終戦のときの沖繩は、さんたんたるものでございまして、全くの焼け野原であつたわけではございませう。さんたんたるところにアメリカ軍のテント村が立って、そこに避難民が収容されました。その収容された避難民たちの間から学校の先生などが出てきて、始まったのが沖繩の政府でございませう。もとより、その上にはアメリカの軍政府があり、これが海軍から陸軍に、陸軍からまた今の民政府に、変わったわけではございます。

そこで、また沖繩の根本的意味に戻りますが、アメリカは沖繩占領と同時に、日本を征服するたぐい膨大な物資の集積を行なつたわけではございません。兵器はもとより、飛行機、人員等々、全部集積したところが、日本は降伏してしまつた。そこで、アメリカにとつて沖繩はとたんに意味がなくなつたわけではございます。これは非常に大事なことだと思つてございませうけれども、アメリカにとつても日本にとつても、客観的に見て、本土のほうから沖繩より有用である、という基本的な条件がここにあるわけではございまして、結局、日本本土を取つてしまえば沖繩は用はないというわけで、人間はいつせいに引き揚げる、物資、弾薬のうちでも使える物はみんな持つて行つてしまふ、あと使い物にならない物がごろごろ

がっている。そして、アメリカ軍の軍人や軍属でも、使える人はみんなGHQに回されたり、あるいは本国に帰ってペンタゴンにはいたり、そういったようなことで、沖縄がここで放置されたわけでございます。

#### 沖縄の軍事基地の意義

ところが朝鮮戦争が起こりまして、本土の基地から続々米兵が前線に出勤して行き、日本経済復興のさきがけともなったことは私が申し上げるまでもありませんが、このときに沖縄というものが非常に見直されたわけでございます。といいますのは、日本本土は工業もあり、これだけの労働力、交通網等があつて、朝鮮戦争遂行には絶対不可欠なものであつたものの、やはり、何といひま

うか、山あり、都市あり、谷ありで、なかなか掌握するのにむずかしい。沖縄がその点いばんやりやすい。これは日本の施政権も彼らが握つているときすでに胚胎しておつたことでございます。これは一つの重要な意味を持つわけでありまして、アメリカ側の考え方としては、自由に使えることと使ひやすいこと、この点から沖縄を彼らは珍重してゐるわけでございます。

で、一九五〇年の朝鮮戦争勃発と同時に、当時非常な手薄の軍備であつたアメリカが北朝鮮軍にさんざんやられて、あわや釜山の橋頭堡から海の中にぼろり込まれそうになつたときに、沖縄にありました兵士とどうも捨ててあつたような武器弾薬等が、案外役に立つたわけでございます。こんなことから、沖縄は一つの補給基地——前線支援

補給基地という意味が出てきたわけでございます。す。

そこで朝鮮戦争の間およびその後にかけて、アメリカが本格的に沖縄に基地をつくり出したわけで、この基地は何であるかといひますと、まず第一に航空基地であります。あそこ嘉手納航空基地というのは、皆さんも存じのとおりこれは東洋一のりっぱな滑走路を持つてゐるわけでございます。ただ単に非常に厚いのみならず、非常に広いわけで、B52のように非常に重くて、しかも非常に長い羽の下に補助車輪をつけておる飛行機は、ああいう滑走路でなければ使えないわけですね。極東でああいう滑走路があるのは、沖縄の嘉手納とグアムのアンダーソン基地、それから日本の横田基地、この三カ所だけで、その後ベトナム

戦争が進むにつれてタイのウタパオと、サタヒップといふところに、そういつたようなものをつくらされたわけでございますが、これはあまりにも前線に近く、いつベトナムの決死隊がはいってくるかもしれない。またあまりたくさんあそこに集める

とタイ政府がいやがるという理由で、B52はグアム島と嘉手納でやつておるわけでございます。そのうち嘉手納から出撃するほうが、グアム島から出撃するよりも一四〇〇㌾も近い。そんなわけで非常に便利だといふので、あそこにB52がおるわけでございます。このB52については、またあとで触れたいと思ひます。いずれにしても、沖縄の基地のうちまず第一にできたのは、そういう滑走路を持つたりっぱな航空基地でございます。これは、戦争前に日本がつくつたものを、





共をにらんでいるわけでございます。よく新聞に出ておりますメーヌBというものは、これは非常に旧式な武器であります。これもやはり天津、上海等、中国の沿岸部をねらっているといわれております。それによってなにかの抑止的効果があるんだと、アメリカがいうております。

それから、さっき申し上げました機動兵力がおりまして、これはいまおりませんが、いざれまた戻すそうで、もし朝鮮半島に何か起こったら、すぐにいまおります在韓米軍二個師団の増援に出る行く体制にあるといわれております。現在は、巨人輸送機等開発中ですから、その出て行ったあとにただちに本国から続々と巨人輸送機で新車の増援を送り、それが嘉手納の広大な滑走路を使ってフルに回転する、そして出てきた兵隊は巨大な兵

舎群に入れて待機させる、そういったようなことでございます。

このほかにいろんな物資弾薬があるわけでございますが、原子兵器、核弾頭につきましては、もとより向こうには秘密を守る義務があるのでわれわれはわかりませんが、おおよそわかっております。一つは、戦術ロケットに使う弾頭である。これはどこで使うかといえば朝鮮で使うわけで、一朝三八度線突破して北から降りてきたときは、その戦術核を使って彼らに脅威を与える。そのために前線に置かずには沖繩にとん積しておるといわれております。

もう一通りの戦術核は、F105戦闘爆撃機にくっ

つけるもので、これは嘉手納に常駐しています。その任務ははっきりいませんが、どうやらこれも、一朝有事の際、大陸沿岸部あたりの作戦を目的としているものである、というふうにいわれております。

三通り目のものが、防衛用でございます。あそこにありますナイキとか、そういったような防空ミサイルにくっつけて、大編隊で来たときに核弾頭でもってぶっ飛ばす。だいたいそういうふうな構想のようでございます。それはまたあとで触れます。

そういったふうには、非常にアメリカにとってバイタルだといわれるような基地になったわけでございますが、もう一つ、その地理的位置が日本本土、朝鮮、中国の海岸、それからフィリピン、台

湾等にすべて同じ距離にあり、その中心にあるというところでございます。これは私のようなしろうとから申し上げるとちょっと語弊がありますが、内戦の利、内側に戦うものの利益を持っているわけでございます。

したがって、沖繩の新しい意義がそこにあるわけでございます。日本帝国時代はただ単に辺境の一地带であったところが、日本が落ち目になると、日本防衛の最前線、そしてこれを犠牲にして本土を守ったというわけでございます。アメリカにとってみれば、日本にはいるための足がかりであり、日本本土を取ってしまえばもうそれはいらなくなりました。ところが、朝鮮戦争をやってみると非常に便利である。しかも日本が独立したあとには、自分たちが勝手に使えるのみならず、各地と

等距離にあるということで、アメリカにとっては  
絶好の基地になったわけでございます。  
そういったふうに沖縄の意義は二転三転して  
るわけでございますが、これは日本に復帰しまし  
ても、アメリカの極東戦略のなめである点は変  
わらない、ということをはっきりいえると思いま  
す。また、そういったような前提であるからこそ  
アメリカも復帰に同意した、という面もございま  
す。

#### 日本政府はどう対処してきたか

だいたいこんなような経過を経てきているわけ  
でございますが、日本政府はどういうふうに出  
てきたかといいますと、昭和二十六年に平和条約が  
調印されて、この平和条約第三条に、日本政

府はアメリカが沖縄を国連の信託統治の下に移す  
という提案をしたときはこれに同意する。そして  
移すまでの間アメリカが立法、司法、行政の三  
権を行使するといふ規定がございます。ここで  
にわくわくとすることは、要するにアメリカが  
沖縄を治めてよろしいということでありま  
す。これは当時その仕事にあたられた下田大使から  
聞いたわけでございますが、当時豪州とかニュー  
ギニアは非常に対日報復心が強くて、これを  
日本に戻すべきでない、あそこに強力な米軍を置  
いて日本を監視すべきだ、というようなことを  
いっており、他方、中国や何かは、当時、これは  
おれもんだ、という言を示したものでございま  
す。その他いろんな要素がからまりまして、結局  
沖縄を日本にそのまますぐに返すということは、

非常に米側としてはやりにくいという状況だった  
そうでございます。  
ところが、さりとてアメリカとしては領土的野  
心のために戦争したわけではなく、沖縄はやはり  
台湾とか朝鮮と違って、日本が征服した外地とは  
いいがたいところでありまして、当時オーストラ  
イティーであった国連を引っぱり出して、あのよ  
うな規定をつくったと、だいたいそういうふうな  
いわれがございます。

こういうものができたときに、日本政府はもと  
より正式に交渉したわけではありませんが、裏で  
は吉田総理が非常に尽力されて、あそこまで持っ  
ていくように努力された、というふうに聞いてお  
ります。

その後日本政府としてはなるべく沖縄を返して

もらいたいとは思っていたのでありますが、なに  
ぶんさっきいきましたような戦略的価値があり、  
アメリカはそうおもしろいところはない。  
他方アメリカのほうも、さっきいきました豪州、ニ  
ューギニア等々がありましてそういうことはで  
きない。  
しかし、日本がだんだん急ピッチで復興して  
くると、そしてにわくわく中国本土ははつきり失  
われたということがわかってくるにつれて、アメリ  
カとしてもやはり日本との関係は維持しなければ  
ならないといふので、故ダレス國務長官の尽力で  
奄美群島が戻ったわけでございます。これは沖縄  
県ではなく、鹿児島県であったのですが、旧琉球王  
国の一部でもあったし、まあいろんなことがあ  
って、アメリカが押えておいたわけでございます。

ど、これは返してくれた。昭和二八年の二月五日、ダレスのクリスマスプレゼント、といわれております。

その後、いろいろ日本のほうでも遠慮しておったんではありますけれども、だんだん日本が復活してきますと、やはり沖繩・小笠原は返して欲しいということを、歴代総理が向こうに行くたびにいつておったわけでございます。初めは、共同コミュニケにそういうことをいつたということも書くのを向こうはいやがっておったのでございますが、だんだんに少しずつ表現をほかにして、たとえば極東の安全保障の維持に沖繩におけるアメリカの基地は大事であることを認めたいというようなことをこつちにいわせて、その上で日本の総理は、沖繩を返してもらいたい、それが日本国民の悲願

である、というようなことをいつた。それに対して「まあまあ、極東の情勢がよくなるまでもう少し待って」とアメリカの大統領がいつた、というような表現のコミュニケがあることは、皆さまのご記憶にあるとおりでございます。

#### 佐藤総理の訪米交渉

で、佐藤内閣が昭和三九年の秋にできまして、昭和四〇年の一月に佐藤さんが初めて第一次訪米をやったわけでございます。この第一次訪米のときのコミュニケを読みますと、いまいつたような問答があつて、そのあとに、小笠原旧島民の募参について前向きに考えてやろう、とアメリカの大統領がいつた、というようなことが書いてあるわけでございます。これが昭和四〇年の一月の

時点でございます。いまから四年前でございます。だからこの間の変化というのは、実に驚くべきものがあるわけでございます。

昭和四二年のコミュニケでは、小笠原は返す。そのためすぐに交渉にはいる、こう書いてあります。沖繩については、両三年以内に返還のメドをつけたい、と総理がいつた、こう書いてあるわけでございます。

私は、第一次の訪米のときも第二次の訪米のときにも現地の在米大使館で政務班長をしておりまして、それに参加したわけでございますが、私、いまでも覚えておりますけれども、ホワイトハウスでコミュニケを発表して、小笠原は返るんだ、ということがわかったときに、記者団から質問が出て、「いつ小笠原は返るのか」という質問が出

たわけでございます。そうしたら日米のえらい人が顔を見合わせて、「さあ、一年以内かな」というようなことをいつておつたのを、私はこの耳で聞いております。現実には半年目——去年の六月二十六日に返ってきています。

そういつたふうに、ものごとは非常に急ピッチで進んでいるわけでございます。ハーマン・カーンの著書の中に、『シンキング・ザ・アンシンカブル』という題、「考えることができないことを考える」というような題の本がありますけれども、まさに四年前、五年前にはほんとうにアンシンカブルであつたような事態にいまなっているわけでございます。それだけ日米関係は非常な進展を見せている、というのが、私の感じでございます。

「ここでもう一つ、まあ私自身のこと恐縮でございませうけれども、非常にアメリカ側の態度を浮き彫りにするような事件がありました。昭和三九年の秋に私は、これは佐藤内閣ができてさう前ですけれども、ワシントンに着任しましてさう早くも沖繩問題と取り組もうとしたわけでございます。で、私は、アメリカ局の私の前任者であった人が東京から出張してきたのをいい機会に、アメリカの國務省の日本課——いまは日本部ですけれども——に頼んで、小笠原問題の軍人さんも文官も集めてもらって沖繩・小笠原問題についてフリーの討論をしたい、と申し入れたら、初め非常に渋っておつたんですけれども結局やってくれたわけです。そして、陸海空の軍人と軍属、それから國務省の日本部の人と一つの部屋にすわって

やつたところが、初めからシーンと静まりかえっておつて、非常にいやな沈黙である。彼らのほうは、何しに来たかという顔でわれわれを見る。そこで私の前任者と私とでもども、沖繩問題、小笠原問題を解決せねば日米関係の将来に響くであろう、というようなことをいつたところが、これまた非常に静かな反応で、なんら反応がない。若干のつまらん反応はありました。たとえば「沖繩人民というのは自治能力があるであろうか」、私は非常にしゃくにさわりました。私は前に中近東、アフリカをやっておつたんですが、「アフリカにコンゴ」という国があつて、大学の卒業生の数が二九名である。それで独立して国連の一員になった、もつとも、国連軍にすぐ介入されてしまつたけれども。沖繩には大学が四つもあ

る。住民一〇〇万人のうち初等教育を受けてない者は一人もない。こういうところを比べてどうだ」といつてやつたわけでございます。これはもちろん、すべてオフレコでやつておつたものから、私もいろんなことがいえたわけでございます。これが公開の場だったらもつと丁寧によつたに相違ないのですが。

そんなやりとりがあつたくらいで、非常につまらない会合だったわけです。ところがあとで聞いてみしたら、われわれがいなくなつたあとのすごい議論が始めたそうで、軍人たちがみんな寄つてたかつて國務省をつるし上げ、何ゆえ日本からああいうやつに來させてああいう勝手なことをいわたのか、何ゆえわれわれをこういう目に合

に食つてかかつたそうです。それはまた非常におもしろい逆効果があつたわけで、國務省の人はそのときはじめて、なるほどこれではたいへんだ、やはり日米関係の将来を考えたら、軍を一日も早く教育して沖繩、小笠原を返還させるようにもつていくべきだと、その個人人はそのときさう思つたそうです。さうさうそれからいろいろやるやつてくれたわけでございます。別に一人、二人の人間がどうのこうのというわけじゃありませんが、案外、外交交渉というのは少数の人間の創意とか努力というものが響くと思われわけでございます。これはもちろん、大きな政策に乗つてやるわけですが、これなんかその例だと思

で、ペンタゴンはその後いかにこういう問題を

いやがってやったかという数々の逸話がありま  
す。これをいちいちあげるとは省略しますが、  
たとえば、昭和四一年の半ばごろ、マクナマラ当  
時の国防長官が、沖繩を日本に返した場合メリ  
カの国防上どういふ影響があり、どういふ予算上  
の問題があるであろうか、という調査を命じたた  
ころ、非常な抵抗があつて、日本流でいいますと  
そんな縁起の悪いことはいやだということで国防  
長官の命令がそのときは行なわれなかつた。  
しかし国防長官は、ハト派の人でして、そうい  
う点は非常によくわかつてゐる人ですから、「い  
やそれはやれ」といって、結局軍部がOKしたの  
が、昭和四二年の初めだったそうです。その研究  
ができ上がったのが四月ごろ。……  
やってみたところが、いろいろやっかいな問題

があるけれども不可能ではない、という結論が出  
たそうでございます。そして八月ごろになつて、  
沖繩は無理だけれども小笠原は返そう、という決  
定がジョンソン大統領のところできされた。あ  
とになつて聞きました。……  
それはともかく、ことほどさう前にアメリカ側  
というものは、沖繩について前向きではなかつた  
わけです。それが今日こうなつてきたのは、非常  
に隔世の感にたえません。……  
アメリカの世論

級な人の間にはわかるようになってきております  
が、だいたいいつて、およそみんな興味ない、  
とさうことでございます。「沖繩というところを  
知ってるか」と聞かれると、アメリカ国民のうち  
若い人は、「さういえば聞いたことがある」とい  
う程度だそうでございます。多少年とつてゐる人  
は、「ああ第二次大戦でずいぶんアメリカの兵隊  
が殺されたところだ」ということをいう程度しか  
わかつてゐない。その中間層は、「ベトナム戦争  
の後方基地として重要だ」とか、そんな程度の知  
識しかない。「これを日本に返したらどうか」と  
いう問いに対しては、「おれにはよくわからん」と  
いうものもあれば、「絶対返すべきもんじやな  
い」というものもあれば、「返したつていいだろ  
う」というものもあつて、たいへんふわふわした

未分化の状態である。こういうふうにいえるよう  
であります。  
結局、アメリカにおきまして沖繩について真に  
関心を持ち、真に発言権を持つてゐる者は、おそ  
らく一〇〇人ぐらいのものじゃないでしょうか。  
この一〇〇人というのは、大統領以下政府の要人、  
軍部の要人、ワシントンにおきますところの主と  
して国防問題、外交問題に携わつてゐる上下両院  
議員、それから若干の非常に高級なジャーナリス  
ト、あるいはその他の人たち、学者とか、せいぜ  
いそんな程度じゃないかと思ひます。  
学者につきましても、私はことしの三月アメリ  
カに出張しまして、ニューヨークに行つて、ニュ  
ヨークの総領事がいゝろんな日本関係の学者、歴  
史学者、経済学者、社会学者等々集めてくれて、

めしを食いながらいろいろ議論したときに、日本のことをいちばんよく知っているはずの学者先生が、おそろしく後ろ向きだったので私も気落ちしたわけでございます。私のほうから歴史学専攻の学者先生がたに、沖細の歴史を手ほどきして、「沖細を返さないとあなたを損するんだ」というような話をしたぐらいでございます。

それはともかくとして、沖細問題について米國世論を喚起したらいだらう、とか何とかいうことを、ことしの春ごろいろんな筋からいわれたとがありますけど、そんなことをやっただけで無理なんであって、だいたい春からいまままでに日本がいくらでもカネをくれて、いくらでも人を雇ってPRをじゃんじゃんやっただころで、なんら効果が無かったといえると思います。要するにこの巨

大なアメリカという国が巨大なお荷物を世界じゅうから背負っておる、そういうようなところで沖細問題をアメリカ人に興味を持たせるといっても、これは不可能であります。さっきいった一〇〇人を対象にしてやっておる、こういうわけでございます。で、その一〇〇人の第一人者が、ニクソン大統領でございます。

昭和四二年になぜ沖細返還が決まらなかったかといいますが、アメリカ国内の軍部や党の猛抵抗があったことはもちろんですが、一つは、大統領選挙が四三年にあるということで、ジョンソン大統領もラスク國務長官もここでコミットしたくない、ということが大きな理由であったわけでございます。そこで、われわれがかたずをのんで見守った去年のアメリカの大統領選挙は、ニクソンが

出現した。

このニクソンという人については私がいまさら解説する必要もありませんけれども、彼の非常に大きな特色でしかも知られていないことは、彼は非常に日本を高く買っているということでございます。彼は日本へ六回来ております。日本のいろんな財界の方ともつながりもあるし、特に岸、佐藤兄弟ともつながりがある。そして彼は、どうも長期的に見てこれは沖細は返さなければならぬ、という気持ちでおるようでございます。しかしながら、ここで大きな問題が二つ、三つあるわけでございます。

一つは、軍事問題であります。重大な意義を持った沖細基地の機能が、日本に返したら減りやせんか、こういうことでございます。それが一つの

大きな問題。

#### ベトナム戦争との関連

しかしもう一つの問題は、ベトナム戦争でございます。基地の機能というのは一般的に言って、極東のバランスをた保つたためにあるわけでございます。ですから、沖細の機能が落ちるといことは、ただちにベトナム支援機能が落ちる、ということになるわけでございます。

ところが、このベトナム問題については、非常に政治問題がからんでおることは一目瞭然でありまして、ベトナム戦争の推移はたちまち大統領選挙に影響する。その選挙というのは七二年でございますが、その選挙の成否を決するものは七〇年の中間選挙で、これは七〇年の十一月でございます。

す。これはご承知のとおり、上下両院議員と州知事の選挙でございますが、この七〇年の選挙戦というのは一年前に始まる。ちょうど佐藤訪米の六月九日一月がその選挙戦のはしりであるわけでございます。

そのときに、「沖縄返還によって沖縄基地の機能をしばらくベトナムに出征しているアライ・ポライズを見殺しにするのか」といったようなことをもしいわれたら、ニクソンにとってこれは非常にやりにくい。七〇年の中間選挙に万が一でも響いたら七二年に響く、という点で、非常に慎重にならざるを得ないわけでございます。

これと同時に、経済問題が別の問題としてあるわけでございます。むしろアメリカの日本に対する関心というのは経済問題のほうが大であります。

で、だいたいにおいて日本品がはいってくるからおれたち失業するんだといった観念が非常に行きわたっているわけです。これは戦前からのつながりがあるわけですから。

だいたい前置きのことは話して、ほんとうのさわりの、先ほどおっしゃった愛知訪米のときのふんい気等はこれから駆け足で申し上げます。

#### 本土並み 核抜きの方針

愛知外務大臣が就任したのは去年の一月のことでございます。それからただちに沖縄返還ということに取り組んだわけでございます。われわれ次官、局長以下さつき愛知さんのうちへ伺ってその問題をまず最初に申し上げたわけでありませう。それから総理のところでの初めにいろ

いろと相談をして、総理の施政方針演説ではつきりと、ことしの秋に訪米して沖縄返還のメドをつける、ということをおっしゃるわけでございます。

ところがそのあと、予算委員会が終わるまでの三ヶ月間というのは、ただひたすらに、「基地の機能は白紙である」ということを繰り返しておっしゃるわけでございます。この間にわれわれとしても、いったい何がほんとうにアクセプタブルなのか。アメリカの基地の機能というのは即日本の安全につながっているわけでございますので、みずから基地の機能を弱めるべきか、あるいは何か特別取り決めをやって何かすべきかといういろんな角度から検討したのでございますが、結局、やっぱりわが日本国内の政治問題としていわれる

「本土並み」ということは、安保条約とその関連取り決めになんらの変更なしに沖縄にも適用する。ということは、事前協議について「イエス」とか「ノー」とかいうことはそのときになって決める、予約をしない、それから核は抜いてもらう、こういう大方針ができたわけでございます。そしてそれを、総理が参議院の質疑のときに示唆し、続いてそれ以来わがほうの基本方針はそれで決まったわけでございます。

これはよく世間の人は、当時基地問題研究会、いわゆる「基地研」というのがそういったような結論を出したんで、いやがる外務省がそれで引きずられた、とっておるんではないかと、けれども実は外務省は去年の八月ごろから、だいたいわれわれはそうでなくちゃならないか、という



こといろいろやっておたわけでございます。なにも、これは私たちがいかにか先見の明があつたかということも申し上げるためにいっているんじゃないかと、実際そうだったわけでございます。この点ちょっと世間の誤解を解きたいと思ひますが、外務省はおよそ沖細返還については後ろ向きである、というような風評がありますけれども、そうじゃないんであつて、われわれのほうが沖細返還の「元祖」だと、実は自分で思っているわけでございます。

それはともかくとして、そういつたような基本方針ができて、三月末私がひそかにアメリカに行つて日本関係の人、ベンタゴンの人、若干の議員さんに会つて、だいたい話をしました。それから四月の末に東郷アメリカ局長が行つて、今度は

あつたんですけれども、非常に向こうは前向きである。ということは、沖細問題はなんらかの形で解決しよう、日本のいう条件で解決するかどうかは別として、とにかく日本と話してみよう、そういう非常に前向きな気分が大統領にも、ロジャーズ國務長官にもあることがわかつたわけでありました。愛知さんが帰つてきて、「非常に成果があつた」といっておつたのは、そういうことでございます。

#### アメリカ側の態度

それからあと、今度は七月に日米貿易経済合同委員会をやりまして、ロジャーズが来日し、そのときに米側のいろいろな態度がはっきりしてきて、たわけでございます。ここで米側は、とにかく日

本と一生懸命交渉してやつていこう、という気が見えたと、はつきりわれわれにも看取されたわけでございます。

そしてそのあと、スナイダー公使というのが任命され、これは前の日本部長ですが、彼が来て、私の上司の東郷局長と私どもといっしょになつて、実は、共同声明の相当重要部分のさわりをどんなふうに組み立てていくかというふうなことをやつたわけでございます。

そして愛知第二次訪米、これも私ついでにきましたけれども、九月にありました。このときに感じたことは、ロジャーズみずから非常な熱意を示して会談の途中で立ち上がつて別室に行つて、ニクソンを電話で呼び出して、指示を仰いで、その場で即決といつたようなことがあつたくらい、非

常に進んだわけでございます。われわれは非常にそのとき心強く感じたわけでございます。ところが、その進展ぶりを見て驚いたのが国防省および統合参謀本部でございます。初めたかをくくっておったところが非常な進展を見せたというんで、あわてで議会に駆け込み、ニクソンのところへ行き、いろんなことをして巻き返しをはかった。

似たようなことにある。ベトナムについては、さっきの政治的なアメリカにとつての要請がある。ただし、日本にとつては逆にベトナム戦争は非常に評判が悪いものですから、あんまりあれするのでもまずいということもはっきりしておる、そんなようなことをいろいろやりました。

結局、いま若干残っている問題がありますし、完全に話が煮詰まったわけじゃございません。新聞を読みますと、ベトナム問題は解決した、核問題も解決した、何もかも解決した、というようなことが毎日出てきているんですが、もしほんとうにそうであれば、私なんぞにも苦労して交渉なんかやっている必要はないのでございます。日本の新聞に出ていることは、不当に楽観か不当に悲観的だと思えますが、いずれにせよ決着したものは

何もございません。しかしだいたいの問題については、日米のおおかたの原則的考え方は一致しておるといふことは申し上げられると思えます。ただ一つ残っているのは、核の問題でございます。

#### 残っている核の問題

この核の問題は、アメリカの国防の基本の問題であります。したがって、彼らとしてもこれは絶対にはまだ出せない問題であります。われわれとしては、笑い話に「つげもの外交」と呼んでいますが、まだまだダイコンは黄色くなっていない、タクアンができるのはまだ先だ。これからの米側の手続としましては、内部でもんだあげくに大統領のところあげて、大統領が熟慮を重ねた上で断を下す、下ったところで最後の話し

合いをする。そのときに、われわれが望むような、本土並みの核抜き」という決断を下してくればいいんですが、そうでなかった場合に……いままでも九合目まで登ってきた最後の一合目というのが、胸つき八丁どころかほんとうに血だらけになる八丁になる、ということも覚悟しております。それが済めばはじめて佐藤訪米が可能になる。結局、佐藤訪米のときにこの問題をあだこらうだとやりとりするのは、われわれの最もとらなるところでございますし、アメリカ側も國務省はそうでございます。そこで、何とかなるものだとわれわれは期待はしておりますが、同時に、いま申し上げました血みどろの交渉もせにやらんかもしれん、ということも覚悟しております。これはおそらく、一週間か二週間の期間に、朝から晩

までやらざるをえないような交渉になるかもしれません。もつとも、米側の決断がよければそんなことをせんでも済むかもしれません。

#### ポスト・沖縄の日米の新時代

万事がうまくいきますれば、佐藤総理がワシントンに行かれたときはニクソンとの間に沖縄問題についてお礼をいい、そして「ポスト・沖縄」の日米の新時代における日本の役割、アメリカのアジアにおける新しい政策、その役割、いかにお互いに協力していくかという大きな話をして、それで日米関係に一時期を画する、そういうことになってくれることを、私どもは大臣以下期待しておるわけでございます。

先ほど理事長さんがいわれましたことを申し上げ

げるのが遅れてすみませんでしたけど、ふんい気はたいへん、良好でございます。いろいろロジャーズみずからと愛知さんとも議論がありました。しかしながら、これは非常に友好裏に、お互いにいっしょになって何かいいものをつくろう、お互いの利益が生きてくるようなものをつくろう、こういうことでやっておりますので、非常にふんい気はよろしゅうございます。

それから、われわれがこつちでやっておりますスナイダーとの事務レベルのふんい気も、お互いに一〇年来、一五年來の友人ですからこれも非常にスムーズにしております。ダメなことはダメだとはつきりお互いにいえる立場でございます。最後に一言だけ申し上げますが、新聞あたりで見ますと、日米はアジア情勢を分析して、その分

析が一致した、だからどうのこうの、というのが非常に多いのですが、実はそうじゃなくて、要するに情勢の分析は初めから一致しているのにきまっているわけでございますが、一致したところで、日本の利益、アメリカの利益があくまでお互いに主張され調整されなければならん、それがほんとうであって、これは今度のコミュニケの文言にはつきる出でるわけじゃありませんが、精神はそうであります。

この点に関連して、よく新聞記者が「情勢判断は一致しましたか」と聞きに来ることがありますが、「一致すれば『イエス』というんだ、というふうに思っているんでございます。情勢判断は一致しても、利益の判断がその上でなされるのだ、この点を申し上げて、私のつたない漫談は終わりに

いたしたいと思えます。どうもご静聴ありがとうございました。(拍手)

宮川 ちよつと新聞では知ることのできないようなお話を伺いまして、非常に興味が多うございました。まだ多少の時間もございますが、何かご質問がございましたらお答えをいたさうではありませんか。……どうぞそちらの方。

#### 質疑応答

問 ちよつとお伺いしたいと思えますけれども、UPIの記事で、だいたい国防省の考え方がシビアで、佐藤首相としては向こうに行つて帰つてこれなくなるんじゃないか、という極端な表現

があるようですけれども、あれは何か、ためにする記事なんだろう。別に意味があるんではないか。

千葉 おそらくそれを書いたUPIの記者は、正直に聞いたままを書いていると思います。これはおっしゃるとおり、軍部が非常に巻き返しをやっておりまして、それがおそらくUPIにも反映されたと思っております。しかしながら、あのUPIの記事に書いてあるのを見ますと、アメリカとしては基地の機能のほろが佐藤内閣より大事なんだ、というふうな判断をしよう、ということを書いておられます。確かに理論的にはそういうこともありうると思えます。しかしながら、そういうことをやればアメリカ

の国益に合致するかどうかという点については、アメリカの指導部ははっきりした認識をもってしているわけがございます。またそれを期待してはいたして、一つのアメリカの現実がそこに顔を出しているということはいえませんが、これが決定的であるとは思いません。

三浦 核抜きというのは、日本では「三原則」だといっているんですけども、向こうさんにとつてはたいへん困る話じゃないですか。千葉 ただいまのことにつきましては、ちょっと補足いたしますと、アメリカの軍部は、非常に苦難に満ちた道を歩んでいるわけでございます。外ではベトナム戦争があのとおりいろいろとつまずきが多い、内ではいわゆる反戦運動が非常に起

こっている。しかも「軍・産の複合体」といったようなことが生まれるくらいに、風当たりが強い。第二次大戦で英雄的な働きをしたというんで国民の感謝のマトであり、その後ろんなことがあっても、やはり冷戦というものを通じて、軍があるからわれわれは安穩に暮らしている、そういう絶対の国民の信頼を当てておいた軍が、いまや妙なことで破綻を来しておる。そこへもつてきて議会が非常な緊縮モードである。いままでは何十何百億というカネを軍のために惜しげもなく出しておったのが、非常な緊縮モードである。ところが、アジアにおいても、アメリカの軍事的存在というものは必要である。しかも兵器は日進月歩である。

つて最大限度の効果をあげようとする兵器、組織というものは、アメリカの軍部にとって非常に魅力のあるものでございます。しかも、一文もよけいにおカネがかからない、ということは何を意味するかといえば、沖組に現存する核能力というのが、非常な魅力を持っているわけでございます。たとえば朝鮮の防衛一つとってみても、かりに通常兵力の一個師団をふやすと、そのすこいカネがかかるわけでございます。これはアメリカの議会が出さないことははっきりしているわけでございます。ところが、金日成は気がいいだ、というのがアメリカの見方ですから、いつ北鮮がわあつとやってくるかもしれない。そのときに、調達のできもしないようなものを当てにしないで、現に手持ちのこの非常に有効な戦略核兵器をなぜ

使っちゃいかんのだと、そういう気持ちがある軍の間に非常に強いわけでございます。

同時に、しかし、そんなものはたして軍のいふとおりであろうか、という疑問が、アメリカの政府部内でもこれまた強いでございまして、國務省はもとより、国防省の中にもそういうのがお

ります。それが、日本の三原則の一つである核抜きというものを実施しないでむりやりやった場合に、はたしてそれだけの努力したかいがあるだろうか、そういうような疑問というの、基本的には向こうにもあるわけでございます。こういって、向こうにわれわれは、二つの希望を託しているわけでございます。

三浦：ベトナムが済めばいいですけども、済ま

ないままにB52をあそこに入らされちゃ困るといふようなことは、向こうは承知できますか。

千葉：まさに今度の交渉の一つの眼目であるわけでございます。ベトナムの南爆をやっておるB52はどういう機能を果たしておるかといふと、あれは元来、原爆を積む飛行機であるわけでございます。ところが、ソ連の対空ミサイルは非常に進歩しましたし、あんなの飛行機が行ったんじゃあぶないというんで、一種の予備兵力的に持っておるんでございます。

遊ばしておいちゃもったいないというんで、グアムのアンダーソン基地にある十数機を試験的に、原爆じゃなくて普通の爆弾の搭載機に切りかえて、ベトナムのジャングルの奥の非常に広い地域を継続爆撃してみたいわけでございます。そうす

ればへたな鉄砲も数撃ちや当たる式で、ベトナムの司令部ぐらゐ飛ばせるかもしれんとやってみたところが、最初の数回目は全然不毛の戦果でただジャングルをへし折っただけでございました。そのうちにだんだんアメリカも情報収集機能が発達してきて、ベトナムの集結地帯がわかってきたわけです。で、だんだん効果があることがわかってきたわけでございます。

いまの現地最高司令官のエイブラムズ中将といふのがウェストモランド大将から引き継いだときには、すでにB52の爆撃のいろんな技術も進歩し、爆弾も非常に進歩したわけでございます。そこで山岳地帯の洞穴陣地の奥深くまで到達するような優秀な爆弾を改良してつくったわけでございます。同時に、もっと高い角度から投下できる

ように、レーダーのコントロールが非常によくなつたわけでございます。要するにグリーンベレーや何か前線で情報を集め、それがいろいろ中継されてきて、結局レーダーの指示でもって爆弾が適時適地点に投下される。そういうことになって、非常に深いところまではいって爆発するということがわかつたわけでございます。

ケサンの戦闘というのが去年の春あつたのはご承知のとおりでして、第二のデイエン・ピエン・フーかと思つてみんな心配したわけでございますが、これが、共産軍がさんざんB52にたたかれたわけでございます。連日連夜B52が行つては爆弾の雨を降らせただけで、これにはさすがの北越軍も参つて、とうとう旗を巻いて引き揚げたわけでございます。これによってあのへんの地形は一変

してしまつたわけでございますけれども、B 52 というものの効果が非常に良かった。  
ところで、最近ニクソン政策でもって地上軍を撤退させているわけでございます。アメリカは承知のとおり物量の国ですから、火力というものが結局すべてを決する、そういう思想でございます。地上部隊を引けばベトナム軍が肩代わりするわけですけれども、それは火力のみならず精神力がなければ鉄砲撃たないわけですから、結局あんまり当てにならない。そうすると、B 52でもって地上軍の火力の減退分を補う、そういう思想でございます。したがって、B 52は不可欠である、というものが、アメリカの軍部の考えであります。ところが、新聞でごらんのとおり、ニクソンのほうはB 52の出撃機数をもっと切り下げる、とか

何とかいう指令をしばしば出しています。この間は、三六時間ほど停止しております。  
そういうようなわけで、政治指導部は必ずしも軍ほどB 52というものを絶対神聖視はしてないわけでございます。このへんは判断の問題でございますけれども、アメリカの交渉当事者としては軍の手前そこらへんでがんばらないで、一汗もかかないで日本に折れたというんじや困る、というところで、猛烈にがんばるわけでございますが、まあ、これも何とかかなりそうでございます。  
要は、非常にありていに申し上げますと、六九年一月、さっきいった七〇年中間選挙戦のはしりのところをいかに佐藤さんとニクソンがともに切り抜けるか、きまめくやいばを、いかにしてぐって通るか。避けて通つちまえばこつちのもの

だ、という、たいへん下品ない方で恐縮ですが、われわれはそう思っているわけで、アメリカも実はそう思っているわけでございます。したがって、何とかかんとかやれると思いが、おそくわけのわからない表現が出てくる。そうすると左翼の方からいろいろ言いがかりをつけられるには非常にもつてこいものになる。われわれはアメリカの人と酒を飲んで笑話をするんですが、英語で「ミニチュアル・アンサティスフアクトリー・ソルーション」、相互に不満足なる解決」というものになるであらう、だからお互いに身内からひっぱられるであらう、といつてよく笑うわけでございますが、ただいまのご質問のベトナムもそういうようなわけで、なかなか速回しな表現で終わると思えます。

三浦 どうもたいへんありがとうございました。(拍手)  
講師略歴  
昭和二十四年東大法学部卒。在学中外交領事官採用試験に合格、外務省大臣官房、ジュネーブ総領事館、欧亜局、経済局、アメリカ大使館などに勤務、四二年北米局北米課長となり、四四年一月現職に就任。

# 日本人の心情

宝仙学園短期大学教授  
真如会主幹 紀野一義

